

## 愚かな者が、神の不在を心のうちに語る

東日本大地震と津波被災のような不条理・理不尽な出来事に「神も仏もない」と人は言う。普段から神も仏も敬っていない人に限ってそう言うから不思議である。「海が憎い」という漁師の言葉が心に残った。生活の糧を与えてくれた神のような恵みの海が家族や家や生活手段（船や網）を奪ったのである。要は、「海」は被造物であり、そのため「曖昧」であって神ではないということである。しかし、人間の感性がこのような理解を受け付けないのだろう。聖書証言では、神が存在するかどうかという問いは存在しない。子どもが、親が存在するかどうかを問うのと同じ無意味な問いである。人はただ神に従いたくないだけでそのように問うのである。我の弟敏（さとし）の特別集会の際の決心カード：「神を信じませんが、従いません！」には失笑。結局、人は偶像である神を信じており、真の神を信じていないのである。神が存在するかどうかという問いそのものが偶像礼拝の問いである。従わないで信じる神は神ではないのだ。

詩編 53 編はパウロの「ローマ書」3：10－18（詩編 14:1－3、コヘレト 7:20、詩編 5:10、詩編 140：3－4、詩編 10:6、イザヤ 59：7－8、箴言 1:16、詩編 36:2）に部分的に引用されて有名である。口語訳では「愚かな者は心のうちに、「神はない」と言うとなっていたが、…

頭書のハマラト（mahalat）は「病氣」を意味するので哀調あるいは短調のような感じか？53 編は 14 編の再録である。「主」（14:2、4、6、7）が「神」（53:3、5、7）に替えられており、5 節は新しく加筆されたもの。「救い」（14:7）は 53：7 では、単数形から複数形に替えられている。

### 1. 神を知らぬ者？ 愚かな者？

ヘブライ語「nabal」はまさに「愚かな者」の謂。愚かとは知的な問題、判断力の問題であるが、無知で愚かな者だけが神の存在、不在を問うのである。従来問いは、神はだれであるか（Who）、神はどのような方（What）であるかであったが、不条理・理不尽な出来事に直面し、もし神が存在するなら「どこに」（Where）存在するかが真剣な問いになってきた。神議論 theodicy の今日的課題であろう。

この詩は愚かな者が神の不在を思う（日本人のように公言はしないのだろうが！）それは「心に呟くだけである」（balibbōw in his heart）だけでなく、彼は腐敗しており、憎むべきことを行い、善（tōwb）を行わないという道徳的、倫理的、律法的な違反行為を行っているので、神を無視しているのである。

### 2. 罪？の普遍性

相対的人間のレヴェルではより良い人、より悪い人がいるであろう。それはそれで真面目に対応すべきである。しかし、神からの視点に立つと、「神が天から人の子らを見渡し、探されると、「目覚めている人」（知覚的に洞察力のある人）「神を求めている人」はおらず、だれもかれも（神に）背いており、皆共に、汚れており、善を行う者は、ひとりもいない。これは、だれかが調査して、統計をとったことではなく、「信仰の事柄」である。人がどのように正しい人に見えても、その人は罪人であると見做さねばならない。有限な人間を偶像視しないため、正しく見える人と比較して無意味に落ち込まないため、そして、やがて、その人に裏切られないために！

「原罪」(original sin)はパウロが語る教理であるが、罪の普遍性(だでもが問題を抱えて生きている)、問題性の人知・人力による制御不能性を受容するように導き、人間を連帯させ、神の恵みによる義認へと追い込むという意味で適切な教理である。ただし、今日ではアダムが罪を犯したから運命的に、また、性交渉によって「遺伝する」という考え方を受け入れることは困難であり、別な解釈が必要であろう。人は自分を越えた力に囚われ、神への不従順、無知、不信頼の罪を犯すことで、アダムに連帯するものである。土から造られたものが土を超えて神に成り上がろうとするアダム(エバもアダムである!)との一体化である(創世記 3:4 造られたものに過ぎない人が神の属性である不死と全知、道徳的完全性というものに到達しようとする幻想)。

### 3. 悪は神によって報い返される(6節後半)

悪を行う者は彼ら彼女らが神の民を食らい滅ぼす者であることを自覚しており、神を計算に入れず、決して神に呼び求めることがないことを知っているはずである。

6節の途中で場面が変わり、神を信じる「あなた」に敵対する彼等への神の介入に移る。このような悪を行う者を神は決して見過ごすことはない。神は裁き主であることを大いに恐れよう。エルサレムを包囲したセナケリブの軍が撤退した故事を考えているのだろうか?

### 4. 救いへの希求

一時的に神の民は見捨てられているように見え、神を畏れない者が支配しているように見える。大いにそのように見える! しかし、詩編の信仰者ら(この場合シオニスト)は礼拝において、イスラエルの救い(yəsuōwt)がシオンから起こるように祈る。

### 5. 応答としての喜び、祝い

信仰者らは神の救いへの応答、捕らわれ人の帰還に際して、喜び躍り(yāgêl Qal Imperf)、喜び祝うであろう(yiśmah, Qal Imperf)。継続的な喜び・祝いの動作。バビロン捕囚からの解放を歌っているのか?すると6節後半の背景とは調和しない。こうして14編が捕囚後の新しい文脈における神殿礼拝の讚美歌として再録されているのだろうか? 信仰は信仰者の言葉・告白を伝承し、新しい状況の中で再解釈・再理解されていく。我らの信仰は啓示の歴史に拘り、証としての文字に拘り、しかも文字と共に働く霊に身を委ねる。